

◇園長室の窓から◇

園長と移動

原 口 純 子

別の情感におそわれた。元気でかわいい子どもたち、一生懸命やって下さった先生方、ご協力いただいた歴代のPTAの会長さんやご父兄の方々、園舎内の施設、設備、園庭の一木一草にいたるまで感謝の気持と、思い出がいっぱいである。本気でこの園を愛していた。愛するものとの別れは心の底からつらく、悲しい。

○春の別れ

この四月に園長の異動があった。公立園であればやむを得ない事とはいえ、創立当初から五年間、力いっぱい努力し、やっと環境も整い、思う保育が実現しかけてきた矢先のことである。残念であり無念でもある。

教育長の辞令一本で動くことは、宮仕えの身であればいたしかたのないことと思う一方、この「春の別れ」は、自分でも思ってもみなかった程、深い惜

○園長の役割

「園長は園を統括し……」という言葉は今まで非常に観念的に理解していたが、今回、他の園長が経営していた園に移り、自分の園を他の園長に委譲するという経験を通して、この言葉の意味を初めて内容を伴った実感として知った。すなわち、各園の実態の違い、また園の個性は、園長による園の統括のし方の差異による面が大きいのである。その意味で園はまさに園長そのものである。

文部省の定めた教育要領を基本におきながらも、保育そのものあり様は、園長の持つ人間観、教育観により大きく異なる。さらにそこから派生する保育方法や内容、行事の持ち方、教諭の育て方、PTAの運営、園舎の使い方、予算のとり方、備品の整え方、遊具や用具の選び方、使わせ方等々、あらゆるものに園長の方針や考え方は反映され、実施されるのである。

幼稚園は小学校に比べてはるかに園長裁量の多い所である。保育の内容にしろ、方法や計画にしろ、教科書があるわけでもなく、進度割当があるわけでもない。それだけ経営に当るものとしては自由度があり、おもしろ味はあるが、経営の実態は百園百様になる。

園長の異動は、小中学校長の異動とは意味を異にする。場合によっては教育の方向も内容も、方法も根こそぎ変わるからである。一斉課題活動を主な保育方法としていた園にとっては、粘土も粘土板も、

粘土ペラも各人持ちに買わせる必要がある。しかし後任の園長が自由選択活動を主体にコーナー保育をしたいと思う場合には、粘土や粘土板、ヘラが園の備品や共有物になっていないのはいかにも困るということになる。

もちろん、公立の場合、県や村から方針や指針が示される。しかし実態は極めて多様である。例えば、同じように「子どもを伸び伸び育てる」といっても、管理を最優先にし、安全と規律をきびしく要求する園長と、子どもの主体性を大切にしたいと思う園長とでは、子どもの伸びの質は自から異なるのは当然である。

公立の園の場合、地域の父母との相互信頼関係は非常に大切である。文字や算数や水泳を教えるといった目に見える効果を売り物に子どもを集めている一部の私立の園などは、そのような事に魅力を感じた親が子どもを入れているのである。これに対して、「子どもに子どもの生活をさせたい。」という即

効性のない、目に見えない保育を主張するには、それなりに父母に理解を求め、信頼関係を育てていかなければならない。したがって、親が子どもをこの園に入れてよかったと思ひ、地域にその保育が定着するのに、三年や五年はかかることになる。

現場の教諭はともかく、園長などというものは、よほどの理由がない限り、異動しない方がよいのはこのようなことがあるからである。

○兼務の園長

園長というのはクラスを持っているわけでもないし、牛乳を数えたり、掃除をするわけでもない。一見何もしていないようにすら見える。しかしその役割の何と大きいことか。一体これを兼務で済まされることなのだろうか。

国公立の幼稚園は全国的にも兼務の園長が多いところを見ると、文部省も、県の指導課も、園長は形

だけあればよく、実質的役割について十分認識していかないかのようにすら思われる。兼務で済ませるから、しっかりしたビジョンもイメージも持てず、若い主任が、自分の今までの経験を頼りに、昨年と同じことを今年も繰り返していくということになりがちである。また十分立派な園経営をしている主任や教頭であれば、兼務などやめて、園長にして、責任を担っていただけばよいのである。

幼児教育が百年以上の歴史を持ちながら、遅々として進展しないのは、他の要因もあるが、一つには園長を兼務で済ませ、誰も本気で保育を考えようとならないからであるという気がする。本当に幼児教育が大切だと思ひ、幼児教育を良くしようと思ひならば、公立園の園長の兼務制をやめることと、専任の園長の研修を充実することの二つが急務である。

(茨城県)